

山田裕康さんを偲んで

小 林 信次郎

山田裕康さんが大阪経済大学の専任教員（英語担当）に採用されたのは1977年4月であった。いわゆる大学紛争の余波、不景気及びオーバードクター等の影響で大学院のドクターコースに進学後も容易に専任教員のポストが得られなかった。20代の最後の年29歳でも専任が決まれば落ち着いて仕事と生活ができるから本人は大喜びだった。本人が活躍していた黒人研究の会の仲間も同じで祝意をあらわしていた。そのころ山田さんは同時代の新しい黒人女性詩人の新しい作品に強い関心を持ち、その研究と紹介に成果を出し始めていた。特に任用決定の前年の1976年に、山田さんを中心とするアメリカ黒人詩人の歌声を紹介する小冊子で季刊の *Somethin' Else* が刊行されだした。同年の1月に創刊号、4月に第2号とたてつづけに刊行されたうえに訳出された詩はほとんどが6、70年代の本邦では未紹介の作品であった。そのうえ翻訳者はほとんどが黒人研究の会の会員であった。山田さんの組織力の非凡さや翻訳力の確かさが強く印象に残っている。

山田さんは身分が決まると満を持していたかのように活躍し始めた。就職した翌年の1978年刊行の大阪経大論集（第121・122号）に「現代アメリカ黒人詩への一視点——黒人女性詩人たちの世界——」を寄稿して注目された。1つには詩のメッセージも言葉も表現方法も新しい黒人詩の誕生を実証的に論述したからであり、2つには文系の新任教員が紀要論文を発表するのは数年後が多いがこの度は就任とほぼ同時に出稿したことになるからである。

山田さんは腰を据えて新しい黒人詩をむさぼり読み始めた。おびただしい女性詩人が誕生したが2、3編の作品を残して消え去る例が多かった。しかし積極的に公民権成立後の社会とかかわりながら自己を探求し、確立しようとする優れた黒人女性詩人も現れ始めた。そのような黒人詩人は「新しい黒人詩人たち」とか「黒人芸術運動」から出てきた詩人と呼ばれているが、その代表格の1人ニッキ・ジョヴァンニに焦点を絞って、詩の表現の仕方や見解の変遷をたどりながら積極的な評価を下した。大阪経大論集第158号（1984）の論文「書くことのはじまりにむかって——ニッキ・ジョヴァンニの第一詩集『黒人の感情、語り口／黒人の見解』をめぐる——」では次の「黒人少年に」という詩でブラックパワー全盛時代の見解を代弁さす。

ラップブラウンの銃を母さんにねだりなさい
熱心に祈ればサンタが夢をかなえてくれることもある
独占ごっこのゲーム盤より色あいをもとめること

すわり込みなどだめキングについていくのもだめ
 まっすぐに通りに出ること
 これはおまえたちにも勝てるゲームだ

長い闘いの結果公民権は1965年にやっと成立したがその後、立役者たるキングもケネディも暗殺され、黒人の実質的生活は改善されず、南部では黒人への差別や迫害はむしろ強まった。この状況が自動的にニッキを「詩人」にしたのであるが、暴力革命一辺倒のみがアメリカ黒人の感情ではない。特にニッキは25歳の69年に子供を産み、子供は革命より何よりも大切だと述懐している。このような状況の中で多面的に日常性や多様性、さらには内面をも見つめて人間性の回復を目指す詩人へと成長するニッキの姿が、大阪経大論集第164号（85年）に「革命への夢——ニッキ・ジョヴァンニ『再生』論——」に詳述されている。そのなかから1篇引用する。原文の英語にも詩のメッセージにも当時の詩人の特徴が良く出ている。

House cleaning

i always liked house cleaning
 even as a child
 i dug straightening
 the cabinets
 putting new paper on
 the shelves
 washing the refrigerator
 inside out
 and unfortunately this habit has
 carried over and i find
 i must remove you
 from my life (16)

おおそうじ

家のそうじはいつも好きだった
 子供のころだって
 キャビネットを
 整頓したり
 棚に
 新しい紙をひいたり

冷蔵庫もすっかり
 きれいにする
 で悪いけどこのくせは
 いまでもかわらなくてこんどは
 あんたをかたづけなきゃあ
 わたしの人生からね

愛するものの対象になるものが大掃除の片づけものと等価値におかれるいう、この詩人特有のユーモアが伺える。ジョヴァンニが清潔好きになるのは性格によるだけではなからう。この小品は1970年の最初の作品である、60年代の通りに出て闘う女性とはちがって、吹っ切れた女のイメージを作り出したと山田さんは解説する。ジョヴァンニは70年代になると社会派からむしろ内省的な作品を書き80年代はさらに大きい視点で黒人女性を描いた。1996にラングストン・ヒューズ賞にも輝いた。これは山田さんのジョヴァンニの読みと評価の確かさを印象づけるものでもあった。

山田さんが取り扱う詩人は黒人女性詩人に限定されるおもむきがあったが、彼女たちは黒人であることで差別を受けた上に女性であることで差別されるという二重の差別に苦しめられてきた。そのうえ軽蔑されて人間存在それ自身も無視されつづけてきた。詩集も売れることは無かった。しかるに先に掲げた第一詩集は発売1年で1万部も売れた。時代思潮もあったが、全く異例のことである。山田さんは同時代や先輩詩人達にも目を広げて、紹介や研究を進めた。その成果の1つが女性詩人アレクシス・デヴオーの大阪経済大学への招待であった。デヴオーが山田さんと同年の気安さもあってか緊張することも無くくつろいでいるようであった。1988年6月28日大教室に溢れんばかりの学生に感情を込めて話すのを聞いていると不思議なことにデヴオーが一瞬であるがクチナシの花を一輪髪にあしらっているような錯覚をしたことをいまでも思い出す。山田さんは後日「解放の祭壇に向かって：アレクシス・デヴオーの詩の世界」（大阪経大論集第187号・第188号89年）にまとめて新しい黒人女性詩人の歴史の継承をしようとする努力を明らかにする。

山田さんが黒人研究の会に入会したのは22歳の1970年（昭和45年）であった。立教大を卒業して関西学院大学の大学院へ進学した人生の節目の時でもあったと思う。それから丸40年のちの2010年（平成22年）7月13日旅立つまで会員でありつづけて黒人の文化の研究と紹介に尽力された。翻訳や論文は主として「大阪経大論集」と「黒人研究」誌に掲載されてある。必要に応じて検索が可能である。それ以外の黒人関係の単行本はつぎの7冊である。偲ぶよすがに発行順に列記してみる。

- (1) アレクシス・デヴオー『言いわけしないで——ビリー・ホリデイの歌——』（共訳1986年）
- (2) ベッシー・ヘッド／グシナ・ムショーベほか『女が集まる 南アフリカに生きる』（共訳1990年）

- (3) アンソニー・ヘイルバッド『ゴスペル・サウンド』（共訳1993年）
- (4) レナード・E・バレット Sr.『ラストファリアンズ レゲエを生んだ思想』（単訳1996年）
- (5) モンガン・セローテ『生まれてくるものたちへ』（単訳1998年）
- (6) 加藤恒彦他編『世界の黒人文学ーアフリカ・カリブ・アメリカ』（共著2000年）
- (7) 風呂本惇子編『アメリカ文学とニューオーリンズ』（共著2001年）

上記の7冊は一見筆者もテーマも地域もバラバラのようだが編者を除く筆者はアフリカのディアスポラであり、テーマは詩か音楽である。例えば (1) は筆者自身がビリー・ホリデイと同じアメリカの女性詩人で、ビリーの再評価を歌いあげる。(2) の編著者はアメリカではなくして南アフリカの黒人女性作家たちであるが多くの詩人達作品も収録されている。(3) にはデイスコグラフィも併記されてある貴重なゴスペルのガイドブックとして注目されている評判の邦訳書。(4) 1960年後半ジャマイカに生まれてたちまち世界中に愛好者を生み出したレゲエといわれている音楽を知るバイブルとも言われている。(5) 本書の作家は南アフリカの詩人で翻訳書が出版された年にはマンデラ大統領を仰ぐ新生南アフリカの国会議員であった。南アの独立前夜黒人居住区を舞台にしてアパルトヘイトと闘う黒人群像をリアルに描いている。(6) 本書はアフリカ、カリブ、アメリカのを代表する50人の黒人作家とその代表作を紹介する現代世界の黒人文学のガイドブックである。筆者15名はほとんどが黒人研究の会の会員である。山田さんは当然のごとくニッキ・ジョヴァンニ、ソニアサンチェス、アミリ・バラカ並びにマヤ・アンジェロウの4人の詩人を担当して黒人詩人の動向を明快に解説する。(7) 本書の第8章を担当し、ニューオーリンズの桂冠詩人と言われていた詩人から自身の詩の朗読やブルースやジャズ ミュージシャンと共演する詩人まで紹介して、これらはアメリカ文学の第一列に加えるべきと山田さんは主張する。これらの仕事を通じて注目されるのは一貫して現代の黒人音楽と詩人達の作品のみならず小説から宗教まで文化全体が対象となり、その地域もアメリカからカリブさらにはアフリカまで広がっていることであろう。

山田さんの黒人研究の会への貢献も多々ある。内容面では主としてニッキ・ジョヴァンニを始めとする1960年代後半から一気に活躍しだした「黒人芸術運動」から出た女性詩人たちの評価と紹介である。会の運営でも企画や編集で恒常的に貢献したがつぎの2つのことが忘れがたい。一つは会報の発行である。山田さんが専任教員になった1977年の黒人研究の会は会誌の歴史で最悪状態であった。会の財政は巨額の赤字で研究会誌どころか会報も出せなかった。さらに編集担当者が海外出張で代役を探せねばならない。何か手を打たなければ機能不全で会自身の存続が危ないと心配する声も出てくるほどであった。その時の山田さんは29歳と若かったが会員歴は既に10年になり手作りの季刊誌発行の経験もあったので思い切って会の窮状を話してみた。幸い協力が得られて翌78年黒人研究の会会報No.13が発行された。驚いたことに太めのサインペンによる手書きでA4版10頁立ての小冊子に出来上がっていた。印刷費は殆ど0に押さえられていた。そのうえヘディングに編

集は『大阪市東淀川区大隅通2丁目大阪経済大学 山田裕康』と大書されていた。会報の次号 No.14 の編集担当者の住所は山田さんの自宅の住所にかわっていた。この時まで会誌には編集担当者の名前は特に表示しないか黒人研究の会事務局の中に掲げるぐらいであった。わざわざ会誌編集担当者の住所まで書いたのはたぶん責任の所在を明確にする意図だと類推したが改めて聞くことも無かろうと思っている間に全く聞けなくなってしまった。いずれにしても大きい負担をかけたが山田さんの協力が無ければ会には少なからぬ影響があったと思える。

もう一つ忘れがたいことは神戸市外国語大学を会場として開かれた黒人研究の会創立40周年記念国際大会（1994年6月24日～26日）での舞台裏での山田さんの献身的な協力である。この国際大会の会期3日の中日の夜は「紙ふうせん」の音楽や詩人本人による詩の朗読等の黒人音楽祭が挙行され、南アの詩人トーマス・カンサとソマリア人のアハメッド両氏が自作の詩の朗読を行う予定になっていた。大会の参加者は国際大会ではあっても大半が日本人であるから、朗読用のオリジナルの詩とその日本語訳は事前に用意して参加者の手もとに届けておくのが筋である。ところがアハメッド氏の資料は事前に届いておらず、当日の朝になってやっと英語の基原稿が入手できた。朗読は午後6時からで約8時間の時間の余裕はあるが初対面のソマリア詩人の詩をたとえ1編であっても翻訳して印刷物にするのは先ず難しい。せめて朗読の前に日本語の解説ができればと思いつつ、山田さんに相談してみた。すると基原稿を見てしばらくすると自ら引き受けてくれたのであった。別室にこもりアハメッド氏に質問をしたりしながらも翻訳が進められた。夕方の朗読時間の前には大ホールの受付に日本語訳付きの配布用資料が並べられたのであった。そのときほっとすると共に山田さんの力と優しさを再確認するのであった。いま回顧してみると本会へのコミットの強さと同時代の黒人詩への思い入りの強さが象徴的に示される営為でもあったと言えよう。

山田さんの黒人の詩と音楽を中心とする文化の研究の深化、拡大ならびに発表のピークは40歳代換言すれば1990年代であったのではなかろうか。先に箇条書きにしたように90年代は単行本の出版はほぼ2年に1冊の高いペースであったが2000年代を迎えるとブレーキがかかり、逝去された2010年7月までの10年間は実質的に黒人研究にかかわる単行本の出版は無かったと推測している。その最大の理由は教育と研究以外の仕事が多すぎて、本来の研究に時間が割けなかったからではなかろうか。勤務先でも山田さんは人気があったようで公表されてある選挙で選ばれることの多い役職の2000年代に歴任したのを知っている範囲で並べてみると、広報委員長、学生委員長、人間科学部長、大阪経済大学評議員さらには同理事という多彩さで、役職で残るのは学長職のみではなかろうかと思わせるほどの多忙ぶりであったようである。

昨年（2009年）の年賀状には少しは研究生生活に戻る云々と添え書きしてあったので2010年6月末の沖縄国際大学での黒人研究の会全国大会では会えるものと期待していた。珍しく不参加であったがやはり公務多端の為だろうと勝手解釈をしていた。ところが後で分かったことだが末期の癌で学会どころでは無かったのである。それでも仕事熱心で講義の数は減らして

も続行していた。他界する2日まえの7月11日は日曜日であったが山田さんが出勤したのにはさすがに同僚も驚いたそうである。無情にも2日後の2010年7月13日山田裕康さんは旅立ってしまった。享年62歳であった。ご母堂と妹さんを残し、仕事も残し、夢も残して往ってしまった。大経大の定年は70歳だそうだからその4,5年前に退職してニューヨークに渡ってゆっくりと黒人音楽を楽しむのだとかねがね家族に夢を語っていたそうである。いよいよ第二の人生のスタートも近く、ニューヨークへの希望を準備し始める時期にきていた。その時の急逝だから本人はもとより誰しも無念の極みであったろう。職場でも哀惜の情深く年末の2010年12月17日(金)には大阪経済大学で大学主催の追悼会が開かれて、山田さんがこよなく愛していたゴスペルが歌われた。いまごろはその歌声を背にして「千の風」となって世界中の黒人の歌を求めての大旅行の途中かも知れない。

(大阪工業大学名誉教授・黒人研究の会顧問)